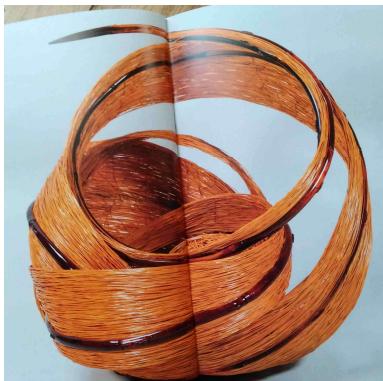


門田二簾 門田簾玉、門田祐一
三人展より（別府市竹細工伝統産業会館）



盛籃「瑞花」 本田青海作 72回伝統工芸品展

身に入むやとき人により大愛す
十月の白磁の皿の冷たけれ
秋暑し何でもありの百円屋
豹柄の背ナ見えかくれ花芭

璃子 (穴まどひ平 21)	高志選
〃 (〃)	〃
〃 (〃)	みち選
〃 (〃)	〃

定例句会（10月の兼題..菊、身に入る）

十月十七日（金）締め..通信句会

十一月二十一日（金）アビスター第五学習室 12時 15時

十二月十九日（金）アビスター第三会議室 12時 15時
（'25年9月19日 兼題）名月、蓼の花 太字は当日句

蓼の花粒状の花密集す
名月や差し込む光部屋の中
草刈りは一人で始む刈りきらぬ

西の空皆既月食赤い月

佐々木由紀子

光成高志

蓼の花花穂に小さき花開く
みちのくの南部風鈴昼寝会
パトカーについて行きたる防災日

原爆忌どす赤き畝紫蘇畑

車押す顔挙を挙げれば盆の月

糲殻のビニール袋三段積

光みち

盆の月八百世帯町静か
ひと雨に色濃くなりぬ蓼の花

落雷か停電のまゝ三時間

踏切の上空走る稻光

落ちそうで落ちぬ榎櫛かりんの頭の真上
秋彼岸はけの水場に入たむろ

浅野正美

朝凧や光の帶が一直線
蝉の声一山一気に沸き上がる

過疎の村見下るす名月運動会
蓼の花搖れ定まらず地裁前
野地の風身の太くあり蓼の花

山尾万世遊

山下寿幸

稻穂先筑波の嶺が見えてをり
菊挿して日陰に並べ花を待つ
竹林の麓に咲いて蓼の花
街路樹の月に照らさる影を踏む
岩肌に秋桜コスマス咲いて人愛である
曇空手賀沼通稻穂かな

名月を捕まえそこね蜘蛛の糸

鉢植えの大きく育ち蓼の花

167 号選句一覧 ○字は選者の頭文字。

亞蓼の花花穂に小さき花開く

由盆の月八百世帶町静か

由朝風や光の帯が一直線

由窓大空にぼっこり浮かぶ丸い月

稻穂先筑波の嶺が霞みけり

由窓過疎の昼見下ろす名月運動会

由糲殻のビニール袋三段積

正由の妻みちのくの南部風鈴昼寝会

由窓ひと雨に色濃くなりぬ蓼の花

由の窓蝉の声一山一気に沸き上がる

由の妻亞蓼の花吹く風やさし少し揺れ

菊挿して日陰に並べ秋を待つ

由蓼の花搖れ定まらず地裁前

曇空手賀沼通稻穂かな

パトカーについて行きたる防災日

落雷か停電のまゝ三時間

由窓蓼の花粒状の花密集す

鶏頭も色とりどりに競つてる

竹林の麓に咲いて蓼の花

野地の風身の太くあり蓼の花

窗特選

沼の水小鳥飛び交ふ夏の
原爆忌どす赤き畝紫蘇畑

踏切の上空走る稻光

由の妻名月や差し込む光部屋の中
名月やお月様はまんまるい

由窓街並み木月に照らされる影を踏む

由の妻名月を捕まえそこね蜘蛛の糸

秋彼岸はけの水場に人たむろ

正由車押す顔を挙げれば盆の月

正由落ちそうで落ちぬ楓櫨かりんの頭の真上

草刈りは一人で始む刈りきらぬ

正由空をこうこう照らすお月様

正由岩肌に秋桜咲いて人愛である

鉢植えの斯くも大きく育ち蓼の花

西の空皆既月食赤い月

俳窓評論纂

* 6.8 原爆忌のこの日の広島平和式典をテレビで見た。

市長・子供たち・総理大臣・県知事・国連事務総長(代
読) それぞれ立派な挨拶であった。グテーレスさんの
過去を記憶せよという言葉が記憶に残った。最後に平
和の歌が歌われた。私はだんだん泪ぐんできた。それ
を見た隣にあるみちさんが私の足の裏をこちよこちよ
と搔いて茶化した。歌の最後の その睦みここに歌わ

ん」という言葉が気に入った。広島で六年間学生時代を過ごしたのは今になつてよかつたのだと思つた。

*朝日⁷の24面は広島平和記念式典の記事。こども代表「平和への誓い」その下に市長の平和宣言、その下に首相あいさつ、知事のあいさつが並んで全文が掲載された。どれもこれも立派な挨拶と思えた。毎年のことながら、今までうつちやつていたが、今年は全部読んだ。テレビ報道も皆見た。¹⁰ こども代表のOne voice・首相の碑文「太き骨は先生ならむそ

のそばに小さきあたまの骨あつまれり」の朗読、知事の「国破れて山河あり」「國守りて山河なし」のあいつ文に感動した。理屈ではなく生の声は現実感があつて韻文（詩）の力をいまさらのように思つた。

* 8.10は長崎忌の記事。

戦後80年原爆 キリスト教はどう

向き合つたかの見出し。浦上の被曝は「神の摂理」永井博士の言葉 復興への力になった の横文字見出し。その下、「戦争は人間のしわざです」ヨハネ・パウロ2世のスピーチ 大きな転機。その下、「核兵器所有 平和への望みを試練にさらす」フランシスコ教皇。左にカトリック教会の動きが年表で示されている。NPTが核不拡散条約、核兵器禁止条約は国際条約として発効し、現在62の国と地域が批准（国家間に条約を承認すること）している。日本はNPTは批准しているが、核兵器禁止条約は批准していない。皆

が望んでいるのにアメリカに遠慮して動けない。私は二〇三年に生協の長崎忌出席の仲間になつて長崎にお参りした。その時案内の男の方が長崎市民は神の罰として原爆を受けたというので私は黙つて聞いたが、そんなことはない。アメリカが原爆を落としたからではないかと心で反問したのを覚えている。ヨハネ・パウロ2世が人間のしわざとスピーチしたのは一九八一年。二〇年以上経つても自虐的気持ちが残つていたのだ。私に慕つてきた平山君は酒を飲むと何時も長崎の鐘を歌つた。歌としてはいい歌であるが、私は歌詞がいまだに気に入らない。その辺のいきさつは「浦上の原爆の語り 永井隆からローマ教皇へ」の著書がある市立大四條知恵さんの記事に書いてある。死んだことの意味を葬撃するより生きる意味を考える方が余程いいもの。

*同¹¹のインタビュー歴史をいかに物語るの見出しにて作家奥泉光さんが問い合わせに答えるかたちのインタビュー。新しい戦前という言葉がいまや強いリアリティーを持ち始めている。長い『戦後』の継続こそ、国民の意思でした。その下で私たちは紛れもなく平和と安定を享受してきた。しかし今度こそ戦後体制を清算すべき時を迎えてます。このままでは次の戦争を阻止することはできない、と思うからです。日本だけが戦後〇年の言い回しを続けられたのは、先の大戦に私たちが向き合つてこなかつた端的な証左

です。米国の意向で天皇が免罪され、西側の国々が賠償請求を放棄することで、日本は戦争責任を見つめる必要もなく国際社会に復帰し、経済成長に邁進できた。しかし今はどうでしょう。ロシアや中国米国までが自国中心主義に傾くなか、従来の国際秩序は崩れつつあります。日本は戦後『戦争をしなかった』というけれど、紛れもなく米国の戦争に間接的に参加してきた。そのことも含めて、戦後体制とその基盤となつた戦後記憶の継承のあり方を問い合わせれば、昭和の『戦前』とは違つ、戦争をしないための新たな『戦前』体制を構築することはできない。戦争記憶の継承に問題があつたということ。経験化という戦争の失敗の本質—戦死者の大半は餓死や病死、誰もが戦争を始めた自覚がない無責任体制、銃後の民の体制協力、鬼畜米英とか言つて敵意をあおつた新聞・こういう体験が国民集団として反省的に共有すること、これを経験化という。何が経験化を妨げたかと云うと、明治国家は神話を引っ張り出しましたが、戦後日本は、尊い犠牲を礎にゼロから再出発し平和と民主主義を手にしたという建国神話が核になりました。これは国民国家を統合するには何らかの『物語』が必要だからです。戦後のこの建国神話では、戦争の元凶は軍部であり、民衆や天皇はどこまでもイノセントな存在になります。Innocent インセントとは無実の、潔白などという意味

です。この物語はGHQと政府の合作ですが、定着に最も大きな役割を果たしたのは、受難の語りを主調とするメディアと小説をはじめとする文化芸術作品でした。例えば、戦後の『ビルマの堅琴』では戦争の主体である国家の姿と殖民地支配の歴史は消去されている。戦友の弔いのため僧侶となり現地に残つた主人公は、あくまで犠牲者であり、幻想としてのアジア的自然性と仏教的世界観に回帰する慰安とイノセンスに満ちた結末となっています。国民の側はなぜこうした物語を受容したのか? 一つは加害者を忘却し犠牲者としての自画像に安住するのに好都合だつたから。もう一つは、戦後の一国平和主義に適合的であつたからだと思います。司馬遼太郎の『坂の上の雲』は、輝かしい明治と明るい戦後を接続し、両者に挟まれた『狂つた戦前』を異形視します。まことに小さな国は一時版図を広げたものの、敗戦で再び小さな国に戻つた。もう一度と戦争はまつぱらだ、という強い嫌悪感とともに。そして植民地支配された人々は戦後日本人の物語から消えてしまつた。そうした歴史物語は、実証的な歴史学の知見で正されるのでしょうか? (中略) 歴史と文学との近似性を歴史家と文学者が確認した。物語というのは人間の基本的な認識の枠組みです。私たちは物事を、因果関係などの物語構造で捉える。その多くが虚構です。家族の不幸が、先祖の悪行とか方位

に原因があるとされたりする。善悪三元論も物語が抱える根本的な感覚です。それでも私たちは、物語なしでは現実を認識できない。ものを語るという行為そのものが、避けがたく物語を呼び込んでしまう。歴史叙述も、物語と無縁ではないのです。むしろ、歴史は客観的だという神話を解体することこそ重要です。客観性を期待できないなら、それぞれの歴史語りの質を上げていくしかないの？（中略）硬直化した分かりやすい物語が持つ強力な作用を解毒する。单一の物語に世界を閉じ込めないこと。一色に染め上げる小説の方がはるかに多い。これは俗情との結託と批判できる。戦争とて兵士個人と軍隊組織との関係を複層的に書く。戦争を敵・味方双方から複眼的に見ることは必要だが、さらに第三項、第四項がある。歴史に押し流された小さな声もある。それらを聞き再現するのは、小説家の大きな使命だと思います。それが俗情と結託した物語の毒を解かすことになる。物語が劇裏です。文学は、政治や経済と違つて言葉以外に何ら裏打ちされるものがない。にもかかわらず人を突き動かしてしまった危険物です。実際に多くの文学者が戦時下、『満蒙は日本の生命線』『無敵皇軍』あるいは玉砕や特攻を美化する物語に加担してきました。今は戦争記憶の『歴史化』の潮目にあります。80年という時間の経過は、体験者による反証を物理的に不可能にしてしまう。都

合のよい史実のつまみ食いによる物語化がいつそうすむ時代を迎え、それは映画や漫画、アニメという娯楽媒体に組み込まれることで伝搬力を増しています。「信じたい歴史しか信じない」という傾向が世界中で広がっているようです。ロシアのプーチン大統領は、ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性を強調し、イスラエルはホロコーストの受難を絶対的正義の根拠かのように扱っている。支配の正当性のため、あるいは国民を束ねるため国家は歴史を作ります。それは権威主義国家に過ぎません。教科書検定もある意味ですが、国家による『正史』つまり『正しい物語』の独占や、歴史語りの規制は極めて不健全で危うい。歴史は物語から逃れられない以上、結局はその並立に行きつくのです。それでも人々の記憶とその痕跡である記録を媒介にして、それぞれの物語に対して批評性と対話性を持つことで、歴史修正主義を退場させていくことはできるはずです。もちろん時間と労力と根気が要る作業です。しかし、硬化した物語の力を解毒するには、繰り返し問い合わせられるべき対話の『場』を粘り強く開放しつづけなければならない。これは民主主義というシステムを維持することと同義のはずです。以上が奥泉光さんのインタビュー記事。

芭蕉の軽み以後（118）

光成高志

おくのほそ道の目的が松島を見ること、それに出羽三山巡礼にあつたとして、先に出羽三山の項を解説したものである。元に戻つて芭蕉の歩いた所から私に引き付けて書き進めよう。左に行程地図を貼り付けた。別冊宝島2375「入門松尾芭蕉(二〇一五)」からスキンした。

行程地図と日程



地名の横に日付(旧暦)が書いてある。拡大鏡で見ると深川20発、千住27発となつてある。この日付の穿鑿は五月号に既述した。この本では長谷川櫂が深川から千住まで多くの門弟たちが舟に同乗し師と別れを惜しんだと記されているが、これは事実ではない。ときつぱり本文を否定している。杉風だけに別れを告げ、

曾良とともに、ひつそりと江戸を出て行つたというものが本当のようだとしている。先行研究者の説をばつさり切つて捨てた説である。彼なりの根拠があるのであればそれを示しておくべきである。私は俳句に親しんでからは隅田川縁の芭蕉記念館や芭蕉史跡や深川当たりは何回も吟行したところであり、千住は鷗外の父の医院跡があるというのでこれも見て、千住大橋北詰の矢立の碑まで歩き、そこから引き返し、荒川土手下の名倉医院まで歩き、ついでに医院のことも触れた。みちゃんと生活を始めた地が草加であつたので、北千住は通勤の乗換駅であつた。おくの細道の冒頭に出来る千住も草加も親近感があつた。曾良の日記には書かれていないが、草加の次は越谷、そして春日部(粕壁)。当地に共榮学園という大学を建てるというのを敷地を見に行つたことがある。春日部から杉戸、幸手を経て栗橋まで国道四号線を約十キロ。利根川の南側、橋がないので関所があつて幕府の重要な関所として知られ、とくに、「入り鉄砲、出女」に厳しかったが、僧形の芭蕉、曾良は手形も断りもいらず関所を越えた。今はここに利根川橋を渡ると栃木県になる。その埼玉県側の橋畔に栗橋関所址の碑があり、裏面に文が刻まれている。見たわけではないが以前紹介した「関東の芭蕉」(阿部喜三男、高岡松雄S41)にその写し

を載せてある。分かりやすく書いてみると、徳川幕府慶長の末年（一六〇一四）栗橋町を開き渡船場を設け奥羽街道駅伝の用務を弁す。次いで寛永元年（一六二四）関所を此の所に置き、爾来二百六十有余年交通を監す。明治二年（一八六九）諸道の関門と共に廃せられ大正十三年（一九二四）九月利根川橋竣工と同時に渡船場も亦廃止となる。大正十三年九月十四日利根川橋開通の日建之とある。西暦は私が入れた。栗橋に拘つて橋と関所まで書いたのは、運転免許場が栗橋にあって、ここまで来たことがあり、又たくやさんの通勤の驛であるご縁があるからである。又、仕事の事で皆を古河駅に集合と指示したのに雪のため上野に出る電車が遅れ、皆を1時間も待たせた記憶がよみがえったから。以上は蛇足。おくのほそ道の本文では草加といふ宿にたどりつきにけりのあとに、「瘦骨の肩にかゝれる物先まくるしむ。只身すがらにと出立侍を、
帯子かみこ一衣いっえは夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさりがたき餌はなげなどしたるは、さすがに打捨うちがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ」。芭蕉の文のなかに、多くの古典籍の余韻が含まれていて、それを一々読み取らねば、芭蕉が読んで共鳴した古典の息吹を理解できない。だから、その古典の仄めかしつまりアリュージョン（allusion）というが、それ

見つけ、なるほどと、手を打つて納得する喜びを味わいたいものだ。理屈はさておき、右のカギ括弧中の原文を訳してみる。瘦骨の肩に載せた荷物がまず私を苦しめた。ただ体一つと出で立つたはずなのに、紙子一枚は夜の寒さを防ぐ、浴衣・雨具・墨筆のたぐい、或はまた否みがたい餌別の品など贈られたものは、さすがに打ち捨てがたくて、道中の煩いとなつたのは仕方がないことだつた。最後のわりなけれは已然形であり、意味は先に出羽三山にて櫻の花を見つけて「春を忘れぬ遅くらの花の心わりなし」という使い方をしていいる「わりなし」である。ここではなんとも止むを得ない意。自嘲とか愚痴を言つていいのではなく、人生の矛盾の相を目の前に見て、やれやれお手上げだといふ自分を苦笑して見ていいのだ。文芸という芸術と人生という生活との矛盾と言つていい。芭蕉自身はみな達観しているのだが、文章に書くとこうなるのだ。紙子は渋紙製の防寒用衣服で夜の防ぎというのは当時の宿は寝具は箱枕一つ貸すだけで寝具は旅客が持参すべきものとされていた。だから旅の必携用具となつてゐる。その他雨具・墨・筆の類（短冊など）、もらつた餌別の品など捨てるわけにもいかないし旅のわづらいとなつたのはしようがないと書いている。芭蕉の旅は現代のような至れり尽くせりの旅行と違つて、歩

いて歩いて場合によつては野宿も辞さない大袈裟にいうと命がけの旅であつた。そういう旅を繰り返して来て、このおくほそ道という大いなる旅を歩いている。これまでの体力の消耗も積もつてゐるだろうが、もう疲れたという言葉は残していない。これまでの芭蕉の旅を概略ふりかえつてみると、29歳に江戸に下り31歳で帰郷（伊賀上野）33歳に二回目の帰郷、41歳に野ざらし紀行の旅に出て、郷に寄り、42歳で江戸に帰着、44歳の秋に鹿島詣の短い旅をこなし、すぐ笈の小文という伊勢、大阪、須磨・明石まで足を伸ばす大旅行の中に居り、45歳に更科を経て江戸に帰る更科紀行をこなし江戸に帰る。そして翌年の46歳の3月にこの旅に出たのであって、それまでに何回も体調悪化を経験している。芭蕉の書簡や句会の仲間たちの残した文から体調のことを（75）に書いていたので再録はないが、なにしろ荷物を背負つての徒步の旅である。現在の我々の旅行とは全然違うのだ。41歳の野ざらし紀行ではより具体的に次の様に書いている。「旅の具多きは道ざはりなりと、物皆扱ひ捨てたれども、夜の料にと紙衣かみこ壱ひとつ、合羽かっぱやうの物、硯、筆、紙、薬等、昼笥ひるげなど物に包みて、後に背負ひたれば、いとゞ脛すね弱く力なき身の跡ざまにひかふるやうにて、道なほ進まず。たゞ物うき事のみ多し」。

この野ざらし紀行は愛弟子の杜国と乾坤無住同行二人と笠に書いて「そぞろにうき立つ心の花の」という華やいだ心をもつて出発したのに、たゞ物うき事といふ对照的な視線で書かれてあるのは、行く前は楽しい心が湧いて来て浮立つけれど、実際歩いてみれば楽しさがないぞということ、心と体のことである。心身はべつものという、もつと言えば文芸と生活、風雅といふフイクション^虚と生のリアリティ^{現実}というジレンマ板挟みに陥つてゐる言葉である。これは現代の我々の命題でもある。命題の意味もここで探つてみると、2は偶数である（正）。 $1+3=7$ （誤）。三角形の内角の和は180度である（正）。このような正誤を判定できる文章や式の事を命題という。数学ではこのように分かりやすいが、文章になると難しくなる。例えば、犬は動物である（真）。人間は卵を産む（偽）。植物は土から栄養を得る（真）。このように内容の真偽がすぐ判定できる命題ばかりではない。右の文芸と生活、もつと突き詰めていうと、虚と実、さらに突き詰めると、心と身体、つまり精神と身体は別物であるという命題の真偽はどうか。真偽は別にしてそういう問いかめ題というのである。（内緒で書くとこの問題はベルグソンによつて真であることが証明された命題なのである）脱線気味の命題を書いたが、芭蕉の心を想像してみると、

やつぱり荷物は路次の煩となり物うき事のみ多かつたのである。この歳の芭蕉は46歳であつたがもう翁と呼ばれていたのだ。年寄の敬称が翁であるから、無論尊敬されていたが。さて、おくのはそ道の本文はいきなり、室の人嶋に詣けいすとなつていて、曾良の曰くという文章が書かれている。先の長谷川櫂監修の地図では省略されている。既述の『関東の芭蕉』(昭和41)が一番くわしく書かれている。著者は二人同乗の車で芭蕉の足跡を追つかけて写真付書籍を出版された。そして、本文ではなく、曾良の隨行日記に沿つて書かれしており、4.11の阿武隈川の端までを注釈され、最後のページに白河市借宿の忘れず山(現地山)の写真が掲載されている。私事であるが、大田原に居を構えた甥の案内で那須一泊旅行をした。「山も庭もうごき入るや夏座敷」の句碑がある淨法寺桃雪邸跡、遊行柳、温泉神社、殺生石を見て回った(H1一九九九)。この時の吟行録もいづれ紹介しようと思うが、その前に日光を略することはできない。次回室の人島、日光に触れたいと思う。

俳文広場

① 今の暑さの中、庭でふうせんかずらが蔓を伸ばします緑色の風船の実を沢山付けて涼しげに風に揺れています。五月頃から蔓を伸ばしカエデの形のかわいい

葉を付けます。茎は細いが結構強く真っすぐに伸び脇芽に小さな小さな四弁の白い花を咲かせます。花の咲いた少し下に丸い形状の小さなヒゲが二本生えて隣りの蔓のヒゲとからみ合つてお互にスクラムを組んだりようになります。支柱にもからまつてバランスを取り合い力強く伸びています。植物にも、無駄なものはなく、この丸ヒゲも己を生かすため、お互を支えるため共存していく上で無くてはならぬもののようにです。花に実が付き丸いふくらみが少しづつ大きくなり蔓のあちこちでかずら_葛がまさに風船のようにな揺れるのです。見るからに涼しげでホッと癒されます。花もひとつそりと控え目でもこの猛暑にも負けず風船を生み続けます。七月、八月に入り早いものから茶色に熟してきて袋を開けると丸い種に白地のハートの模様がまるで判で押したようにくつきりと付いてその意外性に驚かされ厳しい状態の中で結実した種子は愛の結晶の美しい芸術作品のように思えてなりません。見惚れてしまいます。なんと素晴らしい生き様だろう！自分もこうありたい！一度きりの人生を大切に生きこのハート入りの種子のように最後には自分が納得のハーテンに仕立てて緑の棚をこんな思いで眺めているのを知つて知らないでか ふうせんかずらは今日も風

に揺れています。この酷暑まだ続りますね（廣本幸恵）。

②私は一週間に一度車で畠まで草取りと収穫、暑さに負けてお出かけ控えめです。主人は毎朝五時過ぎからウォーキング。畠に寄つて野菜を収穫、汗びつしょりになつて帰宅しています。ランチは朝取り野菜のオムパレード。ねばねばおかず（オクラ、モロヘイヤ、つるむらさき）毎日食べています。7.31の早朝いつも通り畠へ小玉西瓜5個あつたのに一個もない。ハクビシンに食べられて皮と真っ赤な実が散らばつていたそうです。大切に育て楽しみにしていたのにショックが大きかつたです。酷暑の夏、人も動物も同じ。寄り添いながらのりきつていくしかないですね（藤田朋子）。

③飛鳥路を自転車で巡り、飛鳥坐神社から飛鳥駅を目指してペダルを漕いでいる。初めて見て廻った古墳や御陵などの史跡より私は飛鳥の山河に魅かれた。ノスタルジアに駆られた。高校生まで過ごした故郷にいる錯覚に襲われた。故郷の井伏鱒二や木下夕爾が飛鳥のことにつれた文章を知らない。私の生れたところは、入海の穴の海が平野となつて穴の国と呼ばれ、記紀に書かれた品牟遲部をさす品治國である。品治國は大化の改新で品治郡となり、明治に芦田郡と合併して芦品

郡となつたが、昭和の後期に福山市に合併してその名は消えた。私は品治國を惜しみ、ベンネームに取り入れた。新田次郎の真似をしたのである。品牟遲部とは、垂仁天皇の皇子品牟遲和氣命が出雲遠征の途中寄られた土地で、皇子の御名代である。これは古伝承であるが、私は穴国が飛鳥によく似た盆地であるため、御名代になつたのだと想像した。倭健命の望郷の歌の「倭は国のまほろば　たたなづく青垣　山隠れる　倭し美し」は品治國にも当てはまる。ランドサットによる日本列島の地形を眺めて、大和盆地に似た土地は少ない。穴国は文字通り穴で発展性がなかつたが、飛鳥は奈良、京都と北方に開けていたので、都として発展し、近代に東京まで飛んだのも頷ける。杉本苑子さんは飛鳥を空白の舞台と呼んでいる。その舞台はしつかり残つている。飛鳥は俳句のルーツでもあると思つた（品治六郎）——（一〇〇四年「屋根」投稿文）。

④水のきれいな秦野には高志さんと訪れたことがある。駅前から市街地に水路を設けてあり、水の街を強調している。六月に入つて今回はもう少し足を伸ばして御殿場線に乗り南足柄市の山北駅で下車した。そこには酒匂さかわ川があるからだ。高志さんの先祖の地と云うので訪ねたのだったが、ほんとは鮎を求めての吟行旅行であった。酒匂川に行けば清流なので鮎はあるだろ

うと見当をつけていた。酒匂川に辿りつくまでに、ダム下の東電の発電所を過ぎ高架橋にさしかかった。橋の下を覗くと釣人が十人ほど釣竿を傾けていた。下には下りられそうにない。この先に洒水の滝があるというので、そちらに先に行くことにした。私達を追い抜いてウオーキングの会の人たちが滝に向う。幅は狭いが三百メートル級の直下形の滝の水量は多く、轟音に誘われて行けども落石のため立入り禁止で滝壺まで辿りつけない。神々しい姿の滝に一礼して退く。後で知ったのだが、文覚上人の修行の滝であり、つい最近まで滝修行が行われていたという。翌朝、鮎釣りを見ようとして酒匂川の河川敷に下り、釣人に近づく。十二三人いて石ころの多い浅い川に皆膝まで浸かり釣っている。釣糸は流れに任せているようだが、微妙に動かしているようだつた。次第に釣りの様子がわかつてきた。皆囮鮎を使つていて。たまに釣れたらすぐにそれを囮鮎にして釣るのだという。鵜舟のかなしさに通じると思つた。六月一日に解禁したが今日は大雨の後なので漁は少ないらしい。河川敷に立つて私は鮎の姿は見ることができない。水から上ってきた釣人に移動罐の中の鮎をみせてもらつた。一〇センチ前後で小さく天然ものはこんなものだという。川の様子を見に来ていた地元の人の話では、釣つて帰つても家族は誰も

食べないし、自分ひとりでは食べきれず古いものから捨てているという。何と勿体ないことかと思うと、その人と話すのが嫌になつた。しかしまんざら作り話でもなさそうだと帰りに思つた。前日の夕食に出た鮎は間違なく養殖ものだつた。それにしても故意にうねりをつけられたお皿の鮎にはあはれを感じずにはいられない（光みち）。――（一〇一五「萱」投稿文）

⑤今年の夏は猛暑続きのかつて経験したことのない暑さです。息子家族に誘われ館内で遊べる静岡県の焼津グランドホテルに泊まつてきました。駿河湾を一望でき遠く富士山が望める風光明媚なところです。夏休み中であり、子供づれの利用客も多くにぎわつております。ついて早々館内で「駿河湾で夏にとれる魚をさがすスタンプラリー」に挑戦しました。4か所のスタンプ（ヒラメ、エビ、カツオ、太刀魚）を押し、受付にもつていくとはなまる（花）を書いてくれお菓子がもらいました。夏休み広場では輪投げ、お宝すべし、落書きせんべいなどのイベントがあり参加し、プレゼントをもらい孫は大喜びでした。ライブラリエリア、ボーダゲームエリア、サッカーゲーム、卓球、プール、お抹茶体験など楽しめます。ピアノの演奏を聴けたり、大人も、子供も満足のいくものでした。食事は朝夕とも

ビュツフエスタイルで新鮮な海の幸がとても美味しかったです（浅野正美）。

⑥いつも白金葭を送付して頂き誠に有難うございました。貴兄が芭蕉に関する記述を深く表現されておりましたね。自分はあまり芭蕉に関心はありませんでしたが、

読み続けますと、吸い込まれるように目が傾きました。特に羽黒3山についての、行動や、観察について色々と参考になりました。これからも、楽しく続けて下さい。白金葭を愛讀されております、皆さまにも懐かしい故郷をお持ちの事と存じ上げます。光成さんの故郷にも、瀬戸内海を目にした美しい景色があるので下さいか。自分の故郷であります唐津市には数多くの観光スポットがあり、いくつかを誌面に紹介したと思います。博多空港から田舎の家に帰るときには、玄界灘を右手に唐津までの電車旅となります。唐津に近づくと、必ず窓辺には「虹の松原」が目に近づき帰ってきたことかと知らしてくれます。懐かしい風景の一つであります。「虹の松原」は日本の松原3景に選ばれています。静岡県の「三保の松原」・福井県の「氣比の松原」と多少は有名な観光スポットです。皆さん機会がありましたら一度訪ねられてはいかがでしょうか。田舎の人たちは皆を心から「方言」で『よう帰ってきたね』と迎えてくれますよ。虹ノ松原の右手には、鏡山とい

う小高い所があります。ここから、小夜姫が玄界灘に飛び立つたと言う逸話があります。現実は如何なものかと思つてゐるところです。この辺で観光自慢は終わりにします（山下寿幸）。

お便り広場

光成様いつもありがとうございます。7月号20部お送りします。八月は夏休みのことゆつくりと英気を養つて下さいね。毎日ひたすら熱い暑いです。ご自愛ください（7.22木戸敦子）。白金葭7月号をお送りくださり有り難うございます。誌友の仲間に入れていただき嬉しく思ひます。高志様の長文は私には難しいですが、度々拝読していくうちに関心を持ち、知らなかつた知識を教えてくださり楽しみになりつゝります。7月も暑さが厳しい日々でしたね。たくさんの方句から、暑さに負けずお一人でお出かけなさっている様子がうかがえます。（中抜いて俳文広場へ掲載）お体に気をつけて熱中症対策をしつかりしてお過ごしください（1朋子）。（来て見れば畑の西瓜食はれたり（みち）と隣のみちさんが朋子さんのハガキから句にしました。朋子さんそろそろ俳句というか五七五と言葉で描写、つまり写生することを始めてみませんか。畑のものはすべて季語ですから、それを見たままを書いてみて後で575音にまとめれば俳句になります。ハガキに書いてどんどん送つて下されば、私が見て返事します。メールを使えば返信が即座に出来ますので便利です。誌友を卒業して俳友（俳句俳文両方OK）になつて生活を新しくしましょう。こういうことが負担になるのであれば

しばらくこのまま誌友を続けましょ。どちらでもOKです。高志)。
猛暑の中いかゞお過こしでしようか。お見舞い申し上げます。先日は「白金霞」七月号を送り下さりありがとうございました。久し振りのお手紙でつい長々としたためてしましました。少し反省しております。句誌ゆつくり読ませて頂きます。(中抜いて俳文広場へ掲載)どうぞ充分ご自愛下さいます。ように。令和七八年八月八日廣本幸恵 光成高志様
追伸省略。(幸恵さん手紙受け取りました。内容がさらにいいです。
風船葛の写生文、こう言うのを俳文とも呼んでいます。家の庭にも毎年生えてくるのでほとんど無視していましたが、幸恵さんの手紙を打ち込みながら三回確かめに見に出ました。大分以前にその種子が可愛らしいと句会の席に持つて来て見せてくれた俳人もいました。今年は猛暑が予報されたので毎年のことながら緑の棚(ゲーランチ)のためのゴーヤ蔓を植えました。その横に自然に生えた風船葛が伸びています。風船葛は秋の季語になっています。昔作句したことがあります、忘れました。例句は沢山あります。作者それぞれの思いで作っているのでどれがいいとか悪いとかは言えませんが、私は下の句が本意に沿っていると思います。「風の吹くまゝの風船葛かな」(飴山實)
「実をつけ風船葛咲きはる」(同) 作者は静岡大学の教授で俳人でした。ともかくこの調子で俳文なりなんなりを書簡にしてお送り下されば、本誌に掲載していくまでも交誼が結ばれます。追伸:何回も見ているうちに「風船葛はち切れんばかり也」「風船葛針金の蔓握る」二句がとりあえずできました。高志) たいへんな夏を過ごしています。40度とはどうなつているのかしら。月に住む人になるつもり。どうにか考えない生きられなくなり

そう。地球は終りそうみたい、考えすぎ・でもたいへん生きるのが。お日様ごめんなさい。被曝80年で昔を思い出しています。あの頃の生活があつたから今元氣でおられると思います。身体に気をつけて下さい。かしこ(13.8.幸子)。
(幸子姉さん7月号の手紙の後ろに小さい字で書いた箇所をもう一度お読みください、昔の事は過去、もうないものです。今現在のこと目にやつて手紙に書いてみて下さい。食べものの味覚などは書きやすいのではないかでしょうか。俳句の季節を表す名前が多いですよ。今は秋です。秋茄子、秋鯛、無花果、蝗、芋、鰯、いんげん、オクラ、柿、南瓜、菊膾、衣被、苴、金柑、銀杏、栗、栗ご飯、さつまいも、秋刀魚、生姜、新蕎麦、新米、西瓜、酢橘、太刀魚、月見団子・皆季語です。あげればきりがありません。梨、葡萄、マスカット、木天蓼、松茸、とにかく切りがありません。そういうものに気を使い目を向けて生きて行って下さい。高志) 秋暑お見舞い申し上げます。よくもこれだけの暑さが長つきするものですね。庭に野の鳥用に置いた赤いバケツに満杯の水が一日で2回ほど蒸発する熱気がおそろしいです。炎天寺へ行つたときのこと思い出してパンフでもあるかと探しましたが見当たらず、光成様も特別のアクシデントがおありだつたのを思い出しました。どう云う風に行つたのか人頼みだつたので忘れました。竹ノ塚とか云うところに乗りもの何で行つたのでしたつけ。その関連と申してはおかしいのですが、私と同じく多様な事に興味をお持ちになるお一方様なので(もしかしてお持ちかも) 差し上げることといたしました(谷

中の墓地案内)。八月号白金菴が到着するのに行き交いになりました。ですが、七月号の表紙もステキでした。たゞ拙句が出されているのに忸怩じくしたる思いではあります。芭蕉の出羽三山の句、昔も今もすつと受け入れられる句とても好きです。高山れをなさん選は、私の好みではあります。若い頃カナ文字入りの句も好みではありませんでした。今やそんなこと云つてたら俳句作者からほっぽり出されるでしよう。七月号 先生とみちさまのお句。(成り下るゴーヤ 家族となりし鉢虫) 私は食べない、飼育に失敗。病院の待合室に目高亮る 人影を見れば目高の寄つてくる不思議な光景(先生) 人影で寄つてくる(みちさま) 目高の気持ちいろいろ想像しました。もう目がちかくしてきました。突然のかしこです。こゝまで頑張つていらっしゃる抗暑もうすこしガンばらして下さい。頂いたニンニク何と仏壇の上方に吊るしています。すごい魔除けです。白く乾いてプラ下り大の気に入ります。光成高志先生、みち様 R7 璃子(私たちの句まで書いていただきました。恐縮に存じます。竹ノ塚の炎天寺は若い住職が俳人だというので西新井大師を吟行して炎天寺に移動し句会の席を貸してもらつたお寺です。今年の原爆のような炎天の歩きから強冷房の黒臭い部屋に案内されて、句会の最中みちさんが急に倒れて救急車で病院に運びMRIを撮りそこではどうにもならないというので医者の仲間がいる駿河台の日大病院まで隅田川沿いの高架道を救急車で走りました。柔道黒帯の医者が同乗してくれましたので車中雑談をしながら駿河台に向いました。

私は内心みちさんを連れまわしてこれは殺してしまったかと冷や冷やしていましたが、表面は自分でも驚くほど冷静でした。以下略。芭蕉に倣い私らの句は皆見たままの句です。自然は無限、それに少しでも触れて感動したものを五七五にまとめた句です。いつまで出かけられるか先の事は考えていません。最近は季語に出会うと何だか嬉しくなっちゃうんです。高志。お父様お母様へ敬老の日なのでお菓子を送ります。どうぞ食べて下さい。京都のベルメールというチョコレートのお店が10周年で新宿伊勢丹でポップアップストアがオープンしましたので行って来ました。(9.晶子) 残暑につべ残暑の候お伺い申し上げます。お一人とも御健吟のことと存じます。小生今月で95歳となり心身ともに老衰の極、歩行も不自由ですが何とか存えて居ります。駄句をひとつ。「クマに噛まれず転倒もせず秋涼し(陽一) クマどころか今年はセミをあまり聞きません。ではお元気で(9.16 陽二)。(陽一さんエンツチングハガキ有り難うございます。お元気と察しました。上の璃子さんは既に102歳になられお元気に活動されておられます。(高志)。

我孫子日記

	7/18
	句会
	7/25
五井歯科	7/29
胃カメラ診察OK	
	8/1
駅前ク(内科)	8/9
*	向日葵園
	8/15
五井歯科	8/17
	放談会
	8/21
古谷野皮膚科	
	8/22
五井歯科	8/23
	9/5
*3伝統工芸展	
	9/10
朝日デジタル版	
	9/12
*4茨城自然博物館野外	
	9/16
葡萄狩	
	9/19
	句会

*首垂るゝものなし向日葵林立
ひまはりはみんな東ひんがし向いてゐる

ひまはりの花道皆我に向く

アランドロンまがいの向日葵を買ふ

直立のひまわり園に迎えらる（みち）

八頭身ならず十頭身ひまはりは（リ）

手賀沼とひまはり畠隣り合ふ（リ）

ひまわり畠入口に売る夏野菜（リ）

*2 つくつくや畠の部屋でシヤバアーサナ（屍体）

南部風鈴金属音のこまやかに

*3 透かし組花籃といふ涼新

新涼や竹工芸の亀甲紋（みち）

*4 ペグマタイト火成岩梅の落葉を被りをり

シユリーレン梅の落葉を載せている（みち）

飛び過ぎて飛蝗ばつたは池に着水す（みち）

開門橋よりとんぼの池眺めをり（リ）

榛の木の浸かりし岸辺法師蟬（リ）

韶蟬くくぼうし開門橋を惜しむかに

法師蟬宮沢賢治の石並ぶ

古東京湾の板に雪崩るゝ萩の花（みち）

山形の瑪瑙めのう岩立つ虫の声（みち）

水引草の道大木は名札付け（リ）

リチウムペグマタイト取り巻く葛の蔓

梅落葉斑糞岩はんれいがんを囲みをり

*5 この葡萄採り時来るベリー A

葡萄ハウスに試飲禁止の札立てゝ

葡萄狩籠の葡萄が重くなり

コスマスの青に囲まれ葡萄ハウス
坂がかりひつそり咲ける鳳仙花

サイパンの市長も来きたる葡萄園

スカーレット新しき名の葡萄あり（みち）

曼殊沙華リーフデ水車入口に

オランダの国旗はためく秋の風

国旗掲げオランダ風車秋の雲（みち）

風車の周り水路のありて秋の水（リ）

編集後記

上の*4の句にある瑪瑙めのうやリチウムペグマタイト、斑糞岩はんれいがんは宮沢賢治の詩に出て来る岩である。みちさんが詩集を読んだことがあるというので、宮沢賢治全集IとIIを拾い読みした。故昭七さんの鑑賞文（十周年記念号）もあるが、そのI IIの分量と中身に驚愕した。二十歳から柳田國男と共に興味があつたのだが、賢治を打つちやつていた。今後の課題である。

白金霞9月号（通巻167号）誌代一部千五百円（年会費一万五千円）郵便振込口座一〇五二〇一四二二三六一名義シロガシ令和七年9月21日発行編集発行人光成富志発行所〒270-1119我孫子市南新木2-1-17光成方投句先メール又はライン1-7光成方表紙の題字は嘉悦羊三&9.14の白金霞&門田祐一君のご祖父、尊父ご自身三人展作品&伝統工芸展作品&璃子句集「穴まどひ」からの選句。